

# サロンの文芸活動

—皇后定子とその系流— (Ⅰ)

目加田 さくを

## (6) 情こまやかな才媛貴子とその子女

○高内侍貴子 高階成忠女

前掲「大鏡」に、貴子の文才、その子女のとりとへにすぐれた資質才能は物語るところであるが、ここでは、兼家の側室の一人であった道綱母と対比しながら、貴子の文芸の性格、それがおもわせる貴子の人柄というものが、したがって、それが、その子女にどう伝わっていったか、について少し考えてみよう。父兼家に劣らず道隆が所謂、発展家であったことは、栄花物語が、あらわにするところである。

道隆 この中納言殿、才深う人に煩はしとおぼえたる人の國へ治めたりけるが、男子女子あまたありける、女のあるが中にいみじうかしづき思ひたりけるを、男あはせんと思ひけれど、人の心の知り難う危かりければ、たゞ宮仕をせさせんと思ひなりて、先帝の御時に、おほやけ宮仕に出し立てたりければ、女なれど、眞字道隆などいとおく書きければ、内侍になさせ給ひて、高内侍とぞ言ひたりける、この中納言殿、よろづにたはれ給ひける中に、人より

サロンの文芸活動 —皇后定子とその系流— (Ⅰ)

ことに心ざしありておぼされければ、これをやがて北の方にておはしける程に、女君達女字言三四人、おとこ君三人出で来給にければ、いといみじきものにおぼしながら、猶御たはれはうせざりければ、この御子どもといはれ給君達あまたになり給へど、猶この嫡妻腹のをいみじきものに思ひきこえ給へるうちに、母北の方の才などの、人よりことなりければにや、このと、男君達も女君達にも、皆御年の程よりはいとこよなうぞおはしける。中納言どの御容貌も心もいとなまめかしく、御心ざまいとうるはしうおはします……(さまぐ)のよろこび) (松村「栄花物語」岩波吉典)

短い文中に、「たはれ」という表現の頻出に注目しよう。多勢の愛人をもち、すでに長男(山井大納言)をあげていた従四位下山城守守仁王女もいたのであるが、貴子を道隆は北方に選んだ。それだけの理由があったと、筆者はみている。

その一、貴子がつすぐれた和漢の才

その二、貴子がつこまやかな情、素直さ

その三、すぐれた子女を多勢もつこと

等が主な原因であろう。今回は、その二について問題とする。

貴子の漢詩は伝わらない。和歌の方面は、年代未詳であるが、ほ  
 ば詠歌年次にそって並べてみると次のとおりである。

中関白かよひそめ侍りけるころ、儀同三司母

② わすれじのゆくすゑまではかたければけふをかぎりの命ともがな

新古今一四九

中関白かよひはじめ侍りけるころ、よがれしてはべりけるつとめ  
 て、こよひはあかしがたくてこそ、などいひて侍ればよめる

高内侍

③ ひとりぬるひとやしるらん秋の夜をながしとたれかきみにつげつ  
 る

後拾遺九〇六

中関白女の許よりあか月にかへりて、うちにもいらで、とにゐ  
 ながらかへりはべりにければよめる

高内侍

④ あか月のつゆはまくらにおきけるをくさばのうへとなにおもひけ  
 ん

後拾遺七〇一

中納言平惟仲ひさしくありてせうそこして侍りける返事に、か  
 かせ侍りける

高階成忠女

⑤ 夢とのみ思ひなりにし世の中をなに今更におどるかすらむ

拾遺一〇六

帥前内大臣あかしに侍りける時、こひかなしみてやまひになり  
 てよめる

高内侍

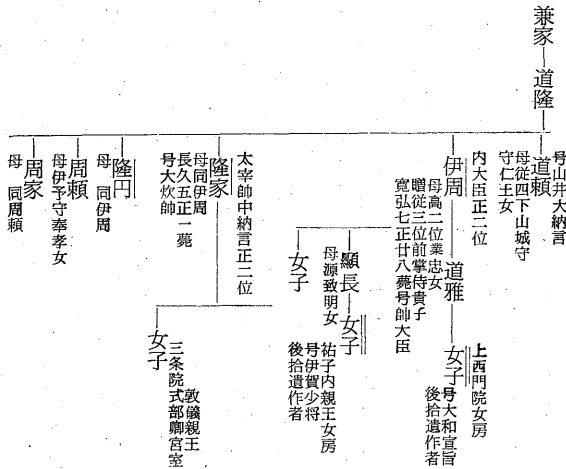
⑥ よるのつるみやこのうちにはなたれて、こをこひつつもなきあかす  
 かな

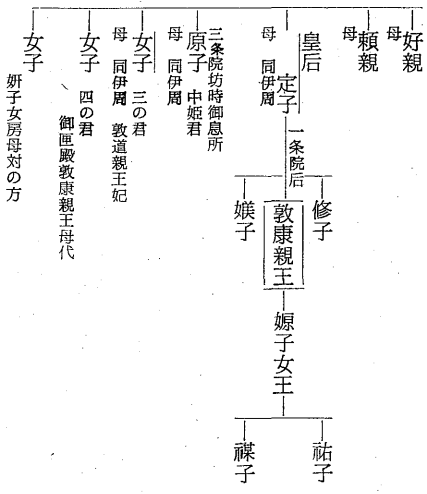
詞花集三三九

⑦ は新古今集卷十三三三の巻頭歌に撰ばれた名歌。定家の小倉百人

一首にもこの歌を探る。伊周出生は天延二年<sup>974</sup>、父道隆<sup>22</sup>才であ  
 る。彼は「永観二年<sup>984</sup>非参議同道隆<sup>33</sup>」(天曆七年癸丑生)正月七叙  
 七右中将如元八月廿七日春宮権大夫右大臣(兼家公)一男母：康保  
 四十一年<sup>1011</sup>従五位下：天禄二十五年<sup>1034</sup>右衛門佐同四正七<sup>1041</sup>上<sup>1048</sup>天延二  
 年<sup>1050</sup>正八<sup>1057</sup>藏人二月七日兼伊與権介十月十一左少将同三正七<sup>1064</sup>正五下<sup>1071</sup>備  
 後権介貞元二正七<sup>1088</sup>従七<sup>1095</sup>従四下<sup>1102</sup>同三十七右中将：兼備中権守<sup>1109</sup>：従  
 四上<sup>1116</sup>：正四下<sup>1123</sup>……

(公卿補任)





したがって、道隆が高内侍貴子のもとに「かよひそめ侍りける頃」はそれ以前、恐らく天延元年<sup>913</sup> 道隆21才頃であろう。後、大入道殿と称され権勢を振うこととなる大納言右大将正三位兼家の長男であり、大鏡に「御かたちぞいとよきよらにおはしましはや」43才、危篤の病床にあつてさへ「いとかはらかにあてにおはせし」という美貌で名門の貴公子、その「花を折り給ひし」若盛り、「たはれ給ひける」さかりの二人の出あいということになる。21才の貴公子道隆は、貴子とはじめて逢った夜、生きる日の限り愛しつづける、等と契ったものであろう。貴子は、その言葉に酔いながらも、世間一般の風潮から、名門の北家兼家公嫡男として世にもてはやされている道隆であるが故に、それが如何に不可能なことであるか、よく

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (I)

承知している。遠からず醒める熱愛ならば、いつそ、君がこのように真実愛して下さっている今日のうちに死んでしまいたい。なんと可憐、一途な心根であろうか。道隆ならずとも打たれぬ人はあるまい。怜愍な佳人は男性の本能というもの、貴公子の身についた軽薄さ、それは道隆自身にすら、どうにもならぬ「たはれ」の根性であると察知し、今更、疑いも、すねもしない。現実を素直に受容する心である。当時の女性は誰も一応はわかまえていた筈である。複数の愛人、ことに北方をもつ貴公子の愛人となる以上は、それを疑い、怒り、怨むのは、所詮、無理といふものである。道綱母にしても「年ごろの人」その他をもつ兼家の、紫式部にしろ、あまり自分と年齢のちがわぬ長男をもつ宣孝の、側室の一人にすぎなかったのであるから。道綱母は「三十日三十夜はわがもとに」といふ。では兼家北方をはじめ、他の側室らはどうなるというのであろうか。貴子の素直さ、謙虚さ、一途な愛が特異な光り、魅力をもつ所以である。歌の表現に添ってみよう。上句と下句、

「忘れじの行末まではかたければ」は、自己に対して道隆が積極的な「思ふ」ではなく、消極的な「忘れじ」といふ表現のつましさ。しかも、それすら、「行末迄はかたければ」と、自己に厳しい断定。男女の愛の宿命を予知する知性。下句はそれに伴う素直な覚悟——今日をかぎりの命ともがな、この愛のたしかなひととき、今日に燃えつきてしまいたい、という情念の激しさ。上句と下句のコントラストが見事である。下句の純愛の吐露で一首を可憐な雰囲気ですつんでしまおう。すぐれた知性、名門の貴公子に対し、微祿の高家の女、貴子の「身のほど」をしるつつ

ましき、それにもまさるこまやかな情の深さである。

②は、「たはれ」ありく道隆は、早速、夜がれをして、他の女性のもとに泊った。気が咎めて、まるで宮中にでも宿直して独寝でもしたかのように装って、(4)といつてよこす。それを貴子は「まあ、明かしがたい、ですって、秋の夜が。(5)それをしみるく味うのは君を待つてまんじりともせず長い夜を明かしかねる私なんですわ。そんな御体験など、ついぞ遊ばしたことの無い貴男様に、どなたが一体、秋の夜は長い、あかしがたい、なんて教えて下すつたのでしよう」とやんわり怨む。しかし、かなり愛に自信をもっている。

③の仕打はひどい。女の許から朝帰りして、貴子のもとに立ちよつたが中にも入らず、もの一言二言いつて帰ってしまう。道隆にしてみれば、佳人を狙う他の恋敵共を牽制する為に、様子みかたぐく一寸、寄つた迄の事。「ふん、昨夜も大丈夫だったらしい」それを知れば満足。道隆一人を後生大事にする貴子には、やりきれぬ切なさである。(6)の嘆き、それにとどめて、訪れた道隆に素気ないふりなぞはしない。道綱母のように。道隆は貴子が、いじらしくなつて、気楽に通つてくるのである。かくて多勢の子が次々と生れ、あいもかわらず道隆は「たはれありく」生活がつづき、「中関白」の榮華は絶頂にいる。貴子は遂に北方となり、二人の間の子、定子は中宮に、男は内大臣に、次女は春宮妃に。枕草子「淑景舎春宮にまゐり給ふ」の條は、登華殿親子対面、晴の場である。

殿、上、晝に一つ御車にてまゐりたまひにけり……「うらやましう、かたがたのみなまゐりぬめり。とくきこしめして、翁嬪に御ろしをだに賜へ」など日一日、たださるがう言をのみしたまふほ

伊周 隆家  
どに大納言、三位の中將、松君ゐてまゐりたまへり……春宮の御使に周頼の少將まゐりたり……」

関白、北方貴子が中宮、春宮妃に対面する、大納言伊周も三位中將隆家も顔をそろえる。異腹の長子山の井大納言道頼。周頼、頼親も参集する。一條帝が入御、定子と「日の入る迄」御帳に入りむつまじいところを面親にみせる。そして戻るが否や、今夜の宿直を命じるとの使。春宮からも御迎への使がくる。めでたし……である。

貴子にとつて幸の絶頂であつた。長徳元年四月十一日、関白道隆が43才で薨去。六月道長右大臣となる。二年正月十四日「今夜華山法皇密幸故太政大臣恒徳公家之間。内大臣并中納言從人等。奉射法皇御在所」伊周 隆家という事件を起してしまふ。「四月廿四日甲午。宣命。以内大臣藤原伊周朝臣為大宰權帥。以權中納言同隆家朝臣為出雲權守。去正月依奉射危華山院法皇。又奉咒咀東三條院之間也……」

紀略。「五月一日：出雲權守隆家、今朝於中宮捕得、遣配所、令乘編代車、依称病也……見者如雲云々、權帥出雲權守共候中宮御所、不可出云々、仍降宣旨、撤破夜大殿戶、仍不堪其實、隆家出来云々、權帥逃隱、令宮司搜於御在所及所々、已無其身者……二日：申云、權帥去晦日夜、自中宮、道順朝臣相共向愛太子山：中宮權大夫扶義談云、昨日后宮乘給扶義車、其後使宮人等參上御所、搜檢夜大殿疑所々、放組入板敷等皆実候云々、奉為后無限之大耻也、又云、后昨日出家給云々、事頗似実者」四日：員外帥出家婦本家云々……尋求之使尚在西山：權帥乘車馳向離宮、為信着藥履、於淳和院辺逗留、此間、公家差左衛門權佐孝道、左衛門尉季雅、右衛門府生伊遠等、馳遣帥所……茜忠宗為尋權帥在愛太子、未帰參、以右衛門尉倫

範、申請副使、依請云々、允亮令申云、実検帥車編代帥已出家、車内有女法師、帥母氏云々、可副遣敷者、仰云、不可許遣、件事等、以外記致時、轉右大將所令奏也、己孝道朝臣婦參、令奏帥申事等、依病者朔日不罷下、□免給女法師可持下之由……五日……權帥去夜宿石作長、左衛門權佐允亮、府生蒞忠宗、今朝送離宮、母氏不可相副之由、宣旨了、又云、朔日依宣旨、官人及宮司等、破皇后夜御殿扉、々太厚不能忽破、仍突破戸版壁板、女人悲泣連声、皇后者奉載車、搜於夜御殿内、后母敢無隱忍、見者歎悲……十二日……今朝、允高朝臣、忠宗等來云、昨夕自山崎罷歸、昨日外帥自離宮着權寺、無人相從、忠宗之、母堂密々相從、允高朝臣等云、十日外帥令請領送使為貞、即取請文、同十一日母堂密々來向、忠宗密々談說也、勸卿無罪之由、大外記致時朝臣云、為貞上帥依病不能免向之由云々、又云、一日陳泰言上出雲權守依病逗留丹後國、病愈了可送任所之由、被下宣旨了、十五日……權帥伊周、出雲權守隆家、依病不赴向配所之由、領送使言上云々、頭弁行成云、權帥者病間安置播磨國使所、出雲權守安置但馬國使所、各令請國司取其請文可婦參者、又信順朝臣申病由兼又万死一生、此間暫不可催追、奉道順朝臣早可追下者、頭談義也記右と、中関白一門、貴子に連なる高階家も一挙に沈淪、中官は遂に出家という最悪の事態、逆境に立つ。この時期の詠が⑤である。

密々に山崎まで同行し、配所へもと願ったが許されず、まさに「都のうちはなだれて」の思いで恋い悲しみ、泣きあかし、遂に鬱々となってしまふ。悲運の子息らへの哀切の思いが命を縮めた。前

掲小右記にみるように、又、榮華物語も情こまやかに、一途に優しい母親像を形成する。不甲斐ない伊周に対し、情容赦なく完膚なきまでやつつける叔父道長に手も足も出ない伊周・隆家を、叱咤激励し、教導する賢母型才媛ではない。詮子のような策畧家でもない。所詮、謀畧家道長の前には、ひとたまりもなく亡びゆく芸術家一門である。政治権力の移行を鋭く説く大鏡が指摘するように、芸術家権門は、うかとしている中に、虎視眈眈と政権を狙う者達に依って、あつけない権力を奪われてしまふのである。師輔の長男、太政大臣謙徳公、豊蔭のペンネームで家集をもつ風流貴公子一條撰政伊尹の一門がそうであつたように。④も恐らく中関白薨後、一門没落期のものであろう。「かゝせ」、「何今更におどろかすらん」という表現に、窺つても鯛、「馬鹿におしでない」と、中関白北方の意地をみせているようである。不幸はつづく。紀畧全年

「六月八日：今夜東三條院東町世号二條宮焼亡。仍中宮定子此間御座依今夕火事渡御亮高階明順宅……」十月に入る。十月八日の條、小右記「：權帥密々京上。隱居中宮云々、自夜部有其聞云々差右衛門權佐孝道被申事由於后宮、差左衛門尉兼志為信、遣播磨、被実検權帥之有無。又帥京上。告既有其人。近則中宮大進生員、是。左府所被談說也……中宮今月当御産期。外帥先日令奏出家之由。被改官符而尚猶不剃頭云々誰譏之甚歎……十一日……大外記致時朝臣告送云、昨日被行雜事、外帥被下送大宰府」紀畧では、十月十日に、「右衛門權佐孝道奏云。昨日未刻。中宮迎權帥入京之由云々。仍仰府生忠宗令守護之處。己有其実。……有左遷除目事、大江以言任飛彈權守、高階信順任伊豆權守、同道順任淡路權守……十三日……右大臣

以下参入。被行権帥追遣官符事」出座まぢかい中宮御所に再び伊周が潜み、捕えられて大宰府へ追遣される。貴子には悲歎のあまり逝去。一月半後、悲しみの中にも、「十二月十六日壬子中宮誕生皇子女：」紀 愁眉をひらく。「出家之後」にもかかわらず一條帝と中宮定子の愛の絆は強いものがあつた。中宮に万一皇子出生となれば、という一縷の希望が伊周、隆家にあり、殊にブレインの高階成忠にあって、勢力挽回を必死に狙っていたのである。伊周には慣れ親んだ妹婿一条帝への信頼、期待が強く、事態観測が万事につけて甘すぎたのである。伊周、隆家に厳正な事態把握と慎重な対応、賢明な身の処し方が必要であつた。

年があけ、「三年四月五日：左大臣依喚参上御所、項頃也後陣仰諸卿云、大宰前帥、出雲権守藤原朝臣可霽、去月廿五日恩詔乎否、不可召上敷、雖潤恩詔可在本所敷、其間定申者、右大臣、左衛門督、宰相中将定申云、件兩人罪潤恩詔敷、但並召上事、所被下勘明法家也者、左大將民部卿申云、罪可霽恩詔、於召上事、可被尋先例也、余、平中納言、右衛門督、勘解由長言申云、罪可潤恩詔、依免犯八虐之文、但置于召上事、只在勅定、左右難定申、左大辨申云、罪可潤恩敷、又乍潤恩詔猶在本處者、余竊思、惟法條之所指、己以分明、然而不可敢申、左大臣定申旨不慥聞、左大臣以各申旨銘心、超座参上御所、良久還着便座、示諸卿云、前之非常大赦之時如此之流人、殊有所恩食、有召上之例、何矧罪潤赦令、在可召上者、左大臣召大外記致時朝臣、令勘申召流人使々例……廿二日……去夜出雲権守隆家入京云々、使内舍人相副、先日或云、不差別使云々、然而彼日聞之、尚遣内舍人者」紀 紀裏では「長徳三年四月某日。大宰権帥伊

周。出雲権守隆家召返之」とだけ記すが、小右記に詳述するところによれば、朝議では、「罪潤恩詔」には、諸卿異論はないが、「召上」については、左大臣道長が発言せず睨みをきかせている為、憚って「罪可潤恩敷、又乍潤恩詔猶在本處者」と発言する者すらある。實資らは「罪可潤恩詔、依免犯八虐之文、但（至）于召上事、只在勅定、左右難定申」と断言し、ひそかに「惟法條之所指、己分明」と思うが、それ以上は敢えて不可申と口をつぐんだ。結局、勅定により召返となつた経緯がわかる。帰京後兩人の所遇は厳しい。公卿補任によれば伊周は長保三王二十六復本位正三位同五九廿二從二位寛弘二：列大臣下大納言上朝参：五正十六准大臣給封戸同六正七正二位二月廿日宣旨無召不参大内者（依呪咀事也）六月：更聽朝参被恩免同七正廿八薨（卅七才）、長徳二年後隆家は長徳四五四帰京十月廿三兵部卿。長保五年権中納言二十五才。長徳二年後伊周は補任に名を列ねない。寛弘二年漸く「預朝議如元」と宣旨があり、辛うじて兄弟朝堂に立つ事となるが全七年伊周は薨卅七才。時に隆家卅二才。隆家は孤立無援となる。

さて、この事件の渦中にあつた、貴子、定子、原子の悲歎、伊周、隆家の心境が、文芸作品として形成しあげられたもの、それは先ず、当人達、貴子とその子女の詠藻である。

次に、それらを巧みにちりばめて物語られた栄華物語「浦々の別れ」の巻である。彼等の詠藻は、貴子前掲。（栄華・勅撰集より）

○伊周

帥殿は播磨はにおはすとて、「こゝは明石となん申」と云を聞しめして

（は）は年代順に並べよ

つくしにくだりはべりけるに、あかしというところにてよみ侍りける(五は榮華の方便か) 帥前内大臣(後拾遺)

1 物思心の闇し暗ければ明石の浦もかひなかりけり

榮華(後拾遺) 羈旅

中納言ことかたへおはすらむを：「白浪はたてど衣に重ならず明石も須磨も己が浦く

といふ古哥をかへさせ給へるなるべし

2 かたへに別るゝ身にも似たる哉明石も須磨も己が浦く

とぞ覚されける

榮華

(はりまにはべりける時、月をみてよめる

帥大臣)

3 みやこにてながめし月をみるときはたびのそらともおぼえざりけり詞花雜下

(つくしに侍りける比、都なる母なくなりぬとききて服きるとて、わかれしほどの事おもひいでてよみ侍りける

儀同三司)

4 そのをりにきてましものを藤衣やがてそれこそかぎりなりけれ玉葉雜四

(つくしよりのぼりて道雅三位のわらははにたまつぎみといはればべりけるをひざにすゑて、ひさしくみざりつるなどいひてよみ侍りける 帥内大臣)

5 あさぢふと榮華に あれにけれどもふるさとの松はこだかくなりにける後拾遺雜五榮華

(つくしよりかへりまうできて、もとすみ侍りけるころのあり

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (II)

しにもあらずあれにけるに、月のいとあかく侍りければよめる

帥前内大臣)

6 つれへとあれたるやどをながむれば月ばかりこそむかしなりけれ詞花雜上

又殿

7 来しかたの生の松原いきてきて古き都を見るぞ悲しき

とのたまへば上

そのかみの生の松原いきてきて身ながらあらぬ心地せしかな榮華

故北方の御墓を拝みに帥殿・中納言殿諸共に桜本に参らせ給…… 帥殿

9 桜もと降るあわ雪を花と見て折にも袖ぞぬれまさりける榮華

皇后宣定子ののちのわぎの夜、ゆきのふり侍りければ

儀同三司

10 たれもみなきえのころべき身ならねどゆきかくれぬる君ぞかなしき統古今哀痛

十首を残している。

1は「あかし」の懸詞、2は古歌を、すつと、自分達兄弟の身上にひきくらべて詠みかえ一首とした。榮華物語の作者も、いたくこの詠に心うごかされたものであろう、「浦々の別れ」と巻に名づけた程である。何気ない技巧が、歌才をおもわせるのである。3月を配所でながめて、「旅の空ともおぼえざりける」とは、何と素直な、美に懂れる心であろうか。折角、皓皓たる月を眺めても恨み

がましいおもいに浸るのが世のつねの流人達であった。伊周は「あつ、都で眺めた月だ、この月は、客地の月とおもえぬ！」と、しばし、うっとり眺めるのである。反面、政治家としてでは負け犬たらざるをえない。この執念のなさ、素直さが、道長に敗退した後、道長の詩宴にのこく出かけて識者の響聲憐憫をすまねく。前掲、大鏡作者が地団駄を踏むところ——「世のすゑ人のこころもよはくなりけるにや、あしくおはしますなど申しかど元方の大納言のやうにやはきこえさせたまふな」と。4、9母への哀切な挽歌。4は実感そのまま素直に詠みあげた。9には、悲哀の中に芸の華がある。「花とみて折にも」と。筑紫で母の訃報に接し藤衣を着る慟哭から、七ヶ月、悲しみも心底に沈潜している。5、6の「石返」されて、妻子の許で寛ぐ率直なよろこびを体験している。半年の間にも皆が愛ってしまつて、「月ばかりこそ昔なりけれ」と落魄の境涯を詠みながら、未だ皇后定子存生中は第一皇子敦康親王立太子の夢があつた。しかし頼みの綱の皇后崩御にあつて、今度こそ、絶望の淵に立った。その詠、10には、雪の縁語を巧みに用いて、雪のように凜然たる気品をもちながら、美しく、儚く逝つた皇后定子、彼女を軸にした中関白亡後の一門の心象が巧みに形成されている。さて、又、伊周の本領は詩にある。

漢詩人伊周は、二中歴の詩人歴に

五家集 後中書王 儀同三司 齊名 以言 匡衡

と挙げられるところ。その詩は、本朝麗藻に14首（群本）。これは江以言19首中書王18首につぐ多数である。母氏の里方、高積善の編とはいえ、矢張り実力を示すものであろう。新撰朗詠にも12首——

（10首以上採択された詩人数名の中に入る）——和漢兼作集4首、本朝文粹1、類聚句題抄1首。次に掲げる。

○本朝麗藻 十四首（群本）

三月三日侍宴同賦<sub>二</sub>間柳發<sub>三</sub>紅桃<sub>一</sub> 儀同三司

①三日花朝和暖辰 紅桃間柳發<sub>レ</sub>粧新 烟濃纒透<sub>レ</sub>綵山月<sub>一</sub> 黛動半

藏曲水春 碧玉簾中裁<sub>レ</sub>錦妓 青羅帳後<sub>レ</sub>拳燈人 震遊如<sub>レ</sub>旧群臣

醉 醉意詠歌魏代塵

同前（暮春侍<sub>二</sub>宴左丞相東三條第<sub>一</sub> 同賦<sub>二</sub>度<sub>レ</sub>水落花舞<sub>一</sub>）

②仙家春暮落花程 度<sub>レ</sub>水飄縹舞自輕 艷態心<sub>レ</sub>歌<sub>二</sub>遮<sub>レ</sub>岸色<sub>一</sub> 奇香

待<sub>レ</sub>拍踏<sub>二</sub>波声<sub>一</sub> 雪膚路濕露裝重 風力橋高錦袖明 鳳鞞宴酣方

欲<sub>レ</sub>幸 可<sub>レ</sub>憐沛老狎恩情

暮春與<sub>二</sub>右金吾<sub>一</sub> 眺<sub>二</sub>望施無畏寺<sub>上</sub>方

③今日引<sub>レ</sub>君出世塵 施無畏寺許<sub>二</sub>交親<sub>一</sub> 情歎偶入<sub>二</sub>烟霞興<sub>一</sub> 官耻

俱為<sub>二</sub>獻納臣<sub>一</sub> 山雨鐘鳴荒巷暮 野風花落邊村晨 此時眺望忘<sub>二</sub>

歸路<sub>一</sub> 暫作<sub>二</sub>騰々閑放人<sub>一</sub>

花落春歸路 以深為韻

④春歸不駐惜難<sub>レ</sub>禁 花落紛々雲路深 委<sub>レ</sub>地正<sub>二</sub>應<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>景去<sub>一</sub> 任<sub>レ</sub>

風便是<sub>レ</sub>趁<sub>レ</sub>蹤尋 枝空嶺微霞消<sub>レ</sub>色 粧胎深閑鳥入<sub>レ</sub>音 年月推遷

齡漸老 餘生只有<sub>二</sub>懣<sub>レ</sub>恩心<sub>一</sub>

夏夜池亭即事 御覽開白記 寬弘五年五月一日 道長の土御門殿での池亭作文

⑤圃<sub>二</sub>某掩<sub>レ</sub>頰及<sub>二</sub>雞鳴<sub>一</sub> 向<sub>レ</sub>老巖勸朋友情 口詠<sub>二</sub>新調千首集<sub>一</sub> 于時於 歷上被 國無傍 故有此興 心扉三不斷 一年月斷云

樓閣明 逸樂君家時日事 風流常得<sub>レ</sub>到<sub>二</sub>蓬瀛<sub>一</sub> 山月初昇

牛女秋思



⑥ 何為靈匹久相思 一歲唯成二會期 行佩必紐冷靈玉 雙蛾且畫遠山眉 未終秋夜難來意 已至朝雲欲別時 此恨綿々無說盡 蒼茫水天問阿誰

與三諸文友泛船於宇治川聊以遣遙

⑦ 簾筵蘆葦宇治川 泛然相憶古神仙 清談緩發益初匣 緩騎遲來棹未前 模嶺晚雲紅慘澹 落澗秋水白潺湲 林南柳樹將軍宅

深草西條有一旧墟謂河有楊柳三株人伝天慶征果使終焉之地也江相公詩云看小鴨毛辺柳謂此字 橋北稻花帝王田 宇治院台榭已數 只有点田

波勢湯々巴峽路 風声颯々洞庭天 山河奇絶詩人記 土地苞茅里老傳 朝位共趁鸞鳳闕 野遊同宿釣魚船 寿夭否泰非吾意

唯誦莊周第一篇 惟三戸部出家 一延和石衣相 之侍婢也

⑧ 無簪昔戲紅樓上 对鏡今愁白屋中 盛者必衰新見取 剃除霜鬢一出塵蒙

同前冬日陪於飛香舍聽第一皇子始誦御注孝經心教

⑨ 經傳百家多異說 微言被世古今聞 老臣在座私相語 我后少年學此文

客有圖晉孟君像以詩讚其德者矣 余昔讀史記知四君之為人同成四韻加三篇末

⑩ 相門有相事无空 田代常為六國雄 名門諸侯傳薛立 謀認下客人秦宮 棧台在昔綺羅月 同里至今任俠風 豪傑人々雖景慕 憐家上牧羊童

賦飛州高使君赴任詩

⑪ 把酒別筵日暮時 為君更寄一篇詩 東都春月秋風夜 四五年来

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (I)

分付誰

齋院相公忌日令修諷誦

⑫ 相公去後幾光陰 每憶才名二淚不禁 翠羽簾前鸚鵡盡

自少年時 世祿有識 佐聞侍公主之帳下 往年々夢會齋院之日相 公簾中出 露 忽作 此作 受 琴等之妙曲 一

嘗札 未習佛門寂滅心 向使当初行二善 冥々中有有相尋 秋日到入宋寂照上人旧房

五台渺々幾由旬 想像遙為逆旅身 異土縱無思我日 他生豈有忘君辰 山雲在昔去來物 魚鳥如今留守人 到此帳然歸未得 秋風暮處一簪巾

余近曾有到寂上人旧房之作 左丞相尊閣忝賜高和 聊次 三本頌敬以答謝

秋景纔殘不及旬 蕭條相憶遠遊身 徘徊巖戶荒涼處 珍重瓊篇答脫辰 增價還歎與市馬 吞声遙謝鄂歌人 適交懷旧詩篇末 抱筆沈吟整萬巾

○本朝文粹 (一)

一條院御時 中宮御產百日和歌序 儀同三司

第二皇子。百日嘉辰。合宴於禁省矣。外祖父左丞相以下。卿士大夫。侍座者濟濟焉。望龍顏於咫尺。酌鸞觴而獻酬。醉恩之餘。私相語云。隆周之昭王穆王曆數長焉。我君又曆數長焉。本朝之延曆延喜胤子多矣。我君又胤子多焉。康哉帝道。誰不欲娛。請諫風俗。將獻

詩詞云尔。

○新撰朗詠 (群本) (十二首)

○雪膚路濕霓裳重 風力橋高錦繡明

櫻水落花舞 儀同三司

夏夜池台

○水煙半湿綺羅冷 山月初昇樓閣明

宇治別業別荘

○横嶺晚雲紅慘愴 落湍秋水白潺湲

未飽風月思

○文路春行看不足 詞林秋望老弥深

右相府日川亭

○馬台東面遠山路 寶閣南頭明月池

秋日遊稻殿寺

○庭松百尺歷年老 山月幾回仍旧円

暮春眺望

○山雨鐘鳴荒巷暮 野風花落遠村春

賀産序

○隆周之昭王 穆王曆教永 吾君又曆教永 本朝之延曆 延喜胤子

多 吾君又胤子多

渡水落花舞

○鳳輦宴酣方欲幸 可憐沛老狎恩情

東宮第一集孫懿孝經

○老臣在座私相談 我后少年学此文

○繡帳粧成燈照曜 金樓宴罷月徘徊

御有延年術

○獻壽吹來盃上露 採花拂盡首間霜

○類聚句題抄 一首

未飽風月思

感時無止吹花色 逢友必求出霧陰 文路春行看不足 詞江秋望老

猶深

○和漢兼作集(御所本) 四首

暮春施無畏寺

儀同三司

○山雨鐘鳴荒巷暮 野風花落遠村春

閒柳發紅桃

○碧玉簾中裁錦妓 青羅帳後拏燈人

夏夜池台

○水煙半湿綺羅冷 山月初昇樓閣明

池水浮明月

○立汀宿鶴応銜玉 在藻潛魚似負水

華麗と閑雅

①の紅桃と閒柳發粧新には、觀念として紅の桃花と緑の柳葉が顯現する。碧玉と青羅の対。②晚雲紅慘愴と秋水白潺湲の対、③紅樓上と白屋中の対、④翠羽簾前と紅花帳下の対、といった漢詩ならではの美しい色感の対が華麗に形成される。①は殊に、碧玉簾中裁錦妓、青羅帳後拏燈人と、あてやかな連想が現出するのである。それは中国以来の応制、応教詩、あるいは貴顕邸第での待宴詩に多くみられるのであるが、平易な辞句を用いて、気負わず美しい世界を詠みあげるところに伊周の人となりがある。左丞相道長第での作文会等、いわば晴の詩の世界は華麗に、伊周にとつて、肩の凝らぬ藝の世界、余人ならば述懐詩で不平、恨みを詠出するところ。前中書王のごとき、「君昏く臣へつらふ」と罵倒し憤懣をぶちまけるが、彼にはそれが無い。伊周は政敵左丞相邸に出入し、④「餘生只有憶恩心」②「可憐沛老狎恩情」と感謝するような気弱な人間である。

親しい友と施無畏寺上方に登って眺望した際、「山雨鐘鳴荒巷暮  
野風花落遠村晨、心にかなつた眺望に帰路を忘るといい、近年、世  
にせぐくまりなれた心を、一時、高く汎くときはなち「閑放人」と  
なると詠む。落魄の詩人なればこそ、荒巷暮という把握、表現が  
来たのである。この「山雨：」「野風：」の二句は世の共感をえた  
らしく、新撰朗詠、和漢兼作集にもこれを採る。⑩の飛州高使の赴  
任におくる詩も、把盃別筵日暮時と、しめやかに詠じ出し、東都  
春月秋風夜四五年來分付誰と、あくまで甘く閑雅である。悲愁など  
という風には、一向、深刻にならないのである。深く怨むことの出  
来ない鷹揚な人となりである。定評あるその風采のように、あくま  
でも美しい。「未<sub>レ</sub>飽<sub>三</sub>風月思<sub>二</sub>」も文雅の人伊周にふさわしい詩題。  
余人ならば苦渋の思念がにじむところである。伊周は「感<sub>レ</sub>時無<sub>レ</sub>止  
吹<sub>レ</sub>花色。逢<sub>レ</sub>友応<sub>レ</sub>求出<sub>レ</sub>霧陰。」とユニークな二句ではじめ「文路春  
行看不足 詞江秋望老猶存」と結ぶ。あくまでも景の美、詩文の美  
を追及してやまぬ甘美な寂しみ、閑雅の世界である。

○隆家

①実方朝臣、みちのくにくだり侍りけるに、餞すとてよみ侍りけ  
る 中納言隆家

874わかれぢはいつもなげきのたえせぬにいとどかなしき秋の夕暮  
返し 実方朝臣

875とどまらむことは心になへどもいかにかせまし秋のさそふを  
新古今  
中納言、宮に御文かゝせ給。「こゝまでは平かにまうでつきて

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (I)

侍。かひなき身なり共今一たび参て御覽せられでや止みなんと  
思給ふになむ、いみじう苦しう侍。御有様のゆかしき」などあ  
はれにかき続け給て

②憂きことを大江の山と知りながらいと深くも入わが身かな  
となむ思給へられ侍」など書き給へり。榮華中納言歌は旅のや  
どりの露けくおほされければ

いつものくににながされはべりけるみちにてよみ侍ける

中納言隆家 後拾

③さもこそは都のほかには旅寝せめうたて露けき草枕かな

榮華 後拾 旅

ことありて播磨へまかりくだりけるみちより五月五日に京へつ  
かはしける 中納言隆家

⑤よのなかのうきにおひたるあやめぐさけふはたもとにねぞかか  
りける 後拾遺雜三

五月五口中納言の給ける

⑥思ひきや別れし程のこの比よ都の今日にあはんものとは

とありければ女君 新納言女

○うきねのみ袂にかけしあやめ草引たがへたる今日ぞうれしき

榮華

故北方の御墓を拜みに帥殿、中納言殿諸共に椋本に参らせ  
給

⑦露ばかり匂ひとどめで散りにける椋がもとを見るぞ悲しき

大宰帥隆家くだりけるに、あふぎたまふとて 長和四年

枇杷皇太后宮 (妍子) 三條后

888 すずしきはいきの松原まさるともそふる扇の風なわすれそ

(返歌のせず不明) 新古今

本朝文料(一)

請被殊蒙哀憐聽歸京。且加身病療治。且訪老母晨昏狀。藤原隆家  
右隆家坐喜以降。離家之後。日月多移。霧露頻侵。山重江復。南  
嶺之葉難採。歎深愁切。東岱之魂底迷。仍為免遠流無期之科。雖仰  
近代有例之恩。玄渙未下。抱愁而止。隆家生于累葉承相之家。仕於  
一朝聖王之代。年已弱冠。未及二九之齡。位忽高貴。初備十六之  
臣。……嗟呼昔侍鳳闕。己為羽翼之臣。今在馬州。長作薊蕘之士。  
天性雖愚。忝懲龍顏逆鱗之誠。地望雖失。泣仰烏頭愛毛之恩……長  
徳二年十月……

紀畧によれば、長徳元年九月廿七日の條に「陸奥守實方朝臣奏赴  
任之由於殿上給酒肴。於晝御座方給祿。叙從四位下」とあるから、  
①はその折の餞別の歌である。四月十一日に父関白道隆薨。五月、  
あとを襲った叔父道兼関白薨。内覧の宣旨をうけた叔父道長が六月  
には右大臣となり、中関白一門は、じりくくと圧迫をうけはじめた  
頃で、流石豪胆の隆家も17才、人生の無常、有為転変をひと味味っ  
ていた折も折、藤氏一門中すでに、沈淪の家門となった小一条左大  
臣師尹の孫實方中将が、矢張り、叔父正三位大納言大将濟時を四月  
廿四日に亡くして、中央政界の官途を断念、遙か遠隔の地陸奥へ赴  
任するという。濟時は父道隆の親しい友であった。(前掲大鏡、道  
隆臨終に際して、「西にかきむけたてまつりて、念佛申させ給へと  
人々のすゝめたてまつりければ濟時、朝光なんどもや極楽にはあ  
らんずらんとおほせられけるこそあはれなれ」紀畧では濟時の死は

後であるが、この様な伝誦も生れる程、親交あったとみるべきか。

①は同病相憐れむに近いしみとくとした情がこめられている。大  
鏡が形成する若き日の隆家像は、花山院と派手に事を構え、世間を  
アツといわせるやんちや貴公子、「このさきの帥殿は時の一の人の  
御孫にて、えもいはずはなやぎ給しに六條殿の御むこにておはせし  
かば常に西洞院のぼりにありき給を、こと人ならば、ことかたより  
よきてもおはすべきをおほきさき、太政大臣のおはしますまへをむ  
まにてわたり給。おほきおほい殿いとやすからずおほせどもいかに  
はせさせ給はん。……いみじうはやるむまにて御紐をしのけて、雑色  
二三十人ばかりにさきいとたかくをはせて、うちみいれつゝ馬の手  
綱ひかへて、あふぎたかくつかひてとほり給を、あさましくおほせ  
ど……帥中納言殿のうへの六條殿の姫君は……御孫ぞかし、されば人  
よりはまいりつかまつりだにこそし給べかりしか……」と尊大傲慢  
な隆家、刀伊入寇を防戦した大胆な隆家で、彼にこのしめやかな情  
があるとは、一見意外の念があるが、実は、彼には、庇護すべ  
き弱い立場の人々に対して真実の情愛があったのである。大鏡が伝  
える刀伊入寇の論功行賞で、輩下の者達の功を具さしにするして申請  
し、過分の恩賞をえさせた。しかし自己の「大臣大納言にもなさせ  
給ふべかりしかど」大鏡と評される所遇には恬淡であった。刀伊国  
に拉致された菅岐・対馬の島民をとりかえして送り届けた新羅王に  
金三百両を贈る等、当時、稀な心やさしい大式であった。前述した  
父道隆(定子に対して女房達をいたわるよう冗談にまぎらわし警  
告する)―、母貴子ゆづりの素質、その教育によって人となった性  
格を思わせる。②榮華の文中、引用する隆家の文(A)には、姉中宮の

後援者となるべき身が、かえって迷惑をかける己を省み、申しわけなく思いつつも、どんなにか案じて下さるであらう心優しい姉中宮に、今一度、我が身を御みせしたい、と切にねがう意がこもる。

②より⑧へつづいて、③では、いかに都を離れた宿りでも、こりやあ、ひどい、「うたて露けき草枕かな」と、鬱憤をはらす。いかに豪胆な隆家の、じめ／＼した思いを、自らふつとばす詠懐がユニークである。

⑤は長徳二年五月一日、謫所に赴く途次の詠。文粹巻七の巻頭を飾る「左降人請帰京」奏状は二十才にみたぬ隆家の堂々たる作である。⑥は四年五月召返された後の感懐である。一昨年今頃、⑤を詠じた時、絶望の淵に立っていた自己が、こうして今、再び京で五月端午の節を迎え得ようとは、思いもかけなかった、という。兄伊周とこととなり、若いながら器量が大きい。思いきりがよく、道長の魂胆を見ぬいていて、自分達は容易に京の土は踏めまいと覚悟していたのである。大鏡が買う所以である。恋々と道長邸の詩宴に出入りする気弱な、みじめつたらしい兄と対照的に大鏡はえがいている。

⑦は優しかった母の墓前に兄と額づき、慈愛溢れる母の面影、その衣ずれに漂う母の匂いすら、つゆちり程ものこらぬ、ほんの少しの残り香すらとどめず散りはてたさくら花のように、母の墓前では、三才の童子にひとしい隆家である。一苦勞しぬいた20才の隆家は、これからはじまる苦淡にみちた廷臣ぐらしに、「ようし」と覚悟をきめているのであるが。

○栄華「浦々の別れ」の物語に、貴子、原子、定子の詠藻がちりばめられる。

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (I)

北方うちなき給ひて

夜の鶴都のうちに籠められて子を恋ひつゝも鳴あかすかな

「はなたれて」。「こめられて」と異文がある。伊周について行ったが、山崎で引きはなたれたのであった。「はなたれて」も「都にこめられて」も実感である。鶴の縁語で「籠められて」が妥当か。いとし子を羽でおほうてはぐくむ夜の鶴、母鶴の身が、それも許されず、子は播磨へ；母は都の中に：「いつ飛び出して子の許へゆくか」と監視されているようなおびえすら出ている。

春宮よりいかなる御消息か有けん、淑景舎より聞えさせ給

○秋霧の絶間／＼を見渡せば旅にたゞよふ人ぞ悲しき

中宮

はるかなる御有様を覚しやらせ給て

とひとりして覚えさせ給ふ

栄華

この淑景舎、中宮、貴子、母と姉妹三女性のこまやかなおもい、その表現は、なんと見事なものであろう。この三人の女性のあついているところが伊周、隆家をつつんでいたのである。「ただよふ」にこもる淑景舎の一途で素直な表白、中宮の「雲の波、煙の浪」という漂渺たる想念形成の絶妙さ、中宮は剃髪している。兄を捕えようと中宮御所にふみこまれた恥辱、兄と弟への切ないいとしさが剃髪の行動をとらせたのである。激しい行動をとりながら、「雲の波……」とおだやかに沈潜して詠む。心中の激情をおほかに包みこんで、にこやかに鷹揚にふるまう定子は、みてきたように恋の場における貴子のすがたをおもわせる。やさしくこまやかな、あつい情をもつ女人達、子息達であった。芸術家一門であった。